【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	大阪府

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	大阪狭山市立第七小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	養護学級	計	教員数
学級数	２	３	２	３	３	３	２	１８	２２
児童数	７８	９３	８０	９３	８９	８８	４	５２５	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

『一人ひとりの学びを生かした授業の創造』

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・３年生算数
児童の理解の状況に差が出やすい教科、学年であるため。
個に応じて筋道を立てて話す力を育成するため。

・４年生算数
学校として、当該教科に関する研究実績があるため。
個に応じて筋道を立てて話す力を育成するため。

・５年生算数
学校として、当該教科に関する研究実績があるため。
個に応じた質問力や討論する力を育成するため。

・６年生算数
これまでの研究成果と児童に対する実態調査の結果から、実施学年・教科の枠を広げ、研究に取り組むため。
個に応じた質問力や討論する力を育成するため。

＜目指す子ども像＞
・３年生
『数学的な考え方の基礎を身につけ、事象について筋道を立てて考える子』
「友だちの考えを自分の考えと比べながら聞こうとする子」
「自分の思いをわかりやすく話そうとする子」
・４年生
『数学的な考え方の基礎を身につけ、事象について見通しを持ち筋道を立てて考える子』
「友だちの意見と自分の考えを聞き比べ、自分の意見を進んで話そうとする子」
「相手や場面、目的に応じて話したり、聞いたりしようとする子」
・５年生
『論理的に考えたり、発展的に考えたりする子』
「相手や場面に応じて自分の考えを話したり、聞いたりしようとする子」
「話し合いを通して、自分の考えを高めようとする子」
・６年生
『論理的、統合的に考え、進んで活用しようとする子』
「必要な資料を提示しながら説明したり、質問したりしようとする子」
「話し合いを通して、自分の考えを高めようとする子」

(2)　年次ごとの計画

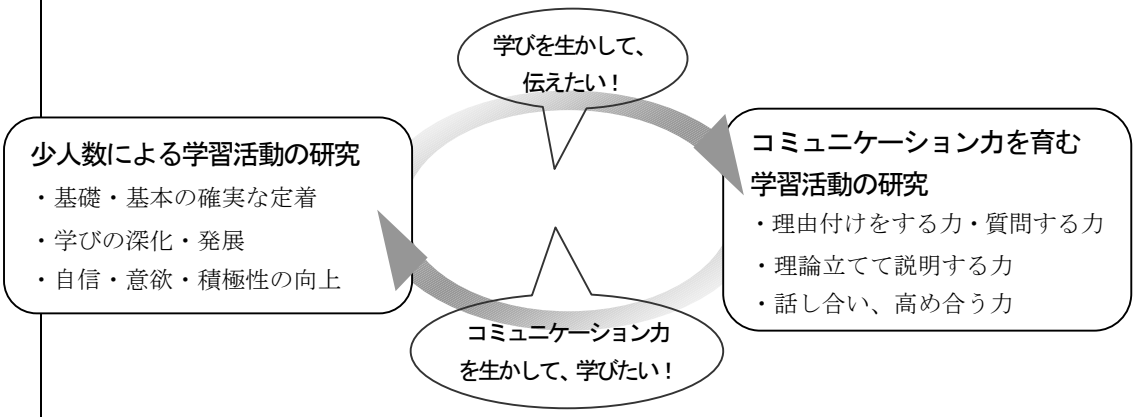
平成15年度

○　テーマ

～筋道を立てて考える力とコミュニケーション力の育成～

○　研究の見通し

算数科の授業において、筋道を立てて考える力の育成を中心とした、基礎・基本の学力の定着をはかる。そのとき必要となるのが、コミュニケーション力である。算数科では、「表現・処理」などの技能面の育成も、当然重要である。それを前提としつつ、ただ反復練習にばかり時間をかけるのではなく、考える力を育てたいと考える。そのために、授業の中で一人ひとりの子どもが「どのように考えたらいいのだろう。」「なぜそうなるのだろう。」といったことを考え、その考えを出し合って話し合っていくことを大切にした学習活動の展開を目指す。その過程において、考えが深まり、考える力が育成されていくだろう。また、算数を学ぶ楽しさも実感でき、学習意欲も高まるだろう。このような力や意欲は、次の単元にも生かされ、他の教科の学習や日々の生活にも生かされていくと考える。このような力を育むための授業のあり方を研究していく。



○　研究の内容・方法

単元ごとに、評価規準を明確にした指導計画を作成する。それに基づいて授業を進め、一人ひとりの子どもの学習活動を評価し、支援していく。また、指導形態については柔軟に捉え、子どもの実態に即した工夫をしていく。単元の評価テストや子どもへのアンケートなどにより、効果を測定する。

平成16年度

○　テーマ

～豊かな学力を確かに育む学習活動の創造～

○　研究の見通し

算数科における個に応じた指導をさらに実践し研究する。「目指す子ども像」の実現に向け、多様な指導形態や指導方法の工夫改善をさらに進める。その中で、どのような単元にはどのような指導形態や指導方法が有効なのか、明らかにしていく。また、コミュニケーション力の育ちについても分析し、どのような分割方法や学習課題の設定が、コミュニケーション力を育むためにも有効であり、自ら課題を解決していく力を育成できるのかということについて、研究を進めていく考えである。

○　研究の内容・方法

平成１５年度の研究で明らかになった課題から、今の子どもたちに、さらに育むべき学力を明らかにする。算数科においては、一層学力向上を図るため、どのような学習活動が必要なのかを研究し、実践していく。そして、他の教科においても一人ひとりの学力を生かし、少人数集団で話し合いによる課題解決をしていくためには、どのような分割が望ましいのかを授業研究を中心に研究していく。

また、教科の評価テストや子どもへのアンケートなどにより、効果を測定する。

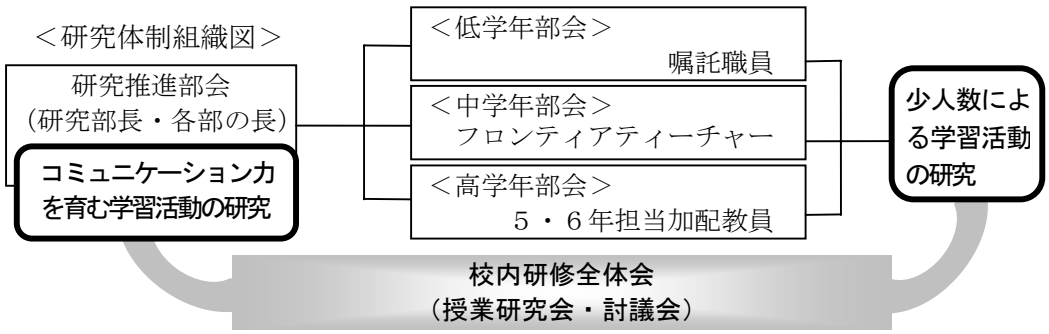
(3)　研究推進体制

フロンティアティーチャー（加配教員）が３・４年の算数を、加配教員が５・６年の算数を、担任とともに担当している。また、嘱託教員２名が１、２年の算数を担任とともに担当している。担任以外の４人で全学年の算数の実態を把握し、指導の統一性が保たれるよう話し合っている。

単元前には評価規準をふくめた指導計画（資料参照）を作成する。それをもとに当該学年と単元の指導について話し合っている。また、指導法や評価方法などについてフロンティアティーチャーが実践例を挙げ、すぐに授業に活用できるようにするとともに、授業の前後では学習材の有効性について評価し、その成果を日々の授業に役立てている。

本校では、平成８年「大阪狭山市教育総合推進地域事業」の指定を受け、全教員による研究組織体制が確立している。校務分掌上に、研究推進委員会を設置し、全教員が３つの部会（低学年、中学年、高学年部会）に分かれ、研究している。平成１３年度からは「コミュニケーション力を育む学習活動の創造」というテーマに取り組んでいる。

全ての学年で研究授業を実施し、授業後の討議会では、全員が活発に発言するなど積極的な研究が行われている。その研究の成果と課題も生かしながら、フロンティアスクールの研究を進めている。



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

２学期末に４年と５年で「算数アンケート」を実施した。（添付資料参照）そのアンケートでは、児童のおよそ６割が「算数が好き」と答えた。「好きではない」と答えた児童は１割未満で、算数好きの子どもの方がかなり多いという結果であった。「好き」と答えた児童の理由のほとんどが、「自分で考えるのが楽しい」「友だちの考えを知れる」といった、考えることについてのことであった。また、クラスを２つに分けて学習することで、算数が「分かりやすくなった」と答えた児童がおよそ７割であった。この研究では、クラスの児童が互いの考えを出し合っていくことで算数の楽しさを感じ、考える力が育まれることを目指して研究している。上記の結果は、その成果だと考える。実際の授業でも、１つの問題に対していろいろな考え方が出され、話し合いが深まっていく場面が多く見られるようになった。

また、授業参観で算数を分割している場面を保護者に公開している。保護者からは、「積極的に復習するようになった」「わからなくてもすぐに諦めず、時間をかけてするようになった」「担任の先生以外の先生にも誉められたことで子どもが意欲的に課題に取り組むようになった」「子どもが自分の考えを整理して順序だてて言えるようになった」「課題が明確なため、子どもが意欲的に取り組むようになった」「子どもがいきいきして勉強のことを話すようになった」といった声がきかれる。

共通して言えることは、「児童の良さを見つけ、タイミング良く評価する事により、学習に意欲を持つ児童が増えたこと」「教員が授業中に児童と個別に話す機会が増えたことにより、積極的に自分の考えが言える児童が増えたこと」、等があげられる。

指導の上では、複数の教員で子どもを観るため、きめ細やかな評価をすることが可能になった。また、担任が加配教員とともに、算数の指導法について協議し、子どもにとってよりわかりやすい指導法の研究、教材の開発が進められるため、質の高い授業の実施が可能になった。

２．今後の課題

学習内容については、授業中の様子やノートの記述、単元後の評価テスト（資料参照）から、ほとんどの児童に一定の定着が見られる。一方で、つまずきが見られた児童に対する支援は、担任からの個別指導に頼っている状態である。組織的な支援体制が必要である。また、単元終了後からある程度時間がたつと、学習内容を忘れてしまう児童も見られる。これは、本当の意味で学習が定着しているとは言えない状態である。年度末に、学年の総復習の時間を確保しているが、日常的にも既習事項を復習していけるようにすることが必要であると考える。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

児童のノートはこまめに点検し、どのような考え方をしていたのか、また、どのように変容していったかを捉えるようにしている。そのノートの記述や授業中の発言で、一人ひとりの「数学的な考え方」の力を把握することに努めている。さらに、授業後や単元後には、児童が学習をふり返り、ノートなどに記述するようにしている。その中で、自分で自分の変容を捉えられるようにと考えている。

単元の評価テストについては、各単元後に実施し、観点（主に「数量や図形についての表現・処理」「知識・理解」）ごとの内容について、定着を確かめている。

児童の情意面について把握するためには、Ⅲの１でも述べた「算数アンケート」を２学期に実施した。算数の授業は分割することへの児童の気持ちや考えを把握し、その後の指導に生かしていく目的で行った。

今後は、上記の「２．今後の課題」で述べた課題を克服に向けて取り組む必要がある。そのためにも、１つの単元の評価テストだけでなく、既習事項の各観点別の学力を診断できるようなテストも実施する必要がある。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

各校の少人数指導担当者による大阪狭山市習熟度別指導実践研究会において、授業研究を中心とした交流を図っている。今年度は、１２月１日に、大阪狭山市教育委員会主催による公開授業と討議会を行い、４年生の算数で学級を２分割している授業を公開した。授業後は、それまでの指導の流れを説明し、算数の少人数指導のあり方を中心に、討議会を行った。その討議会では、フロンティアスクールがどのように個に応じた指導を進めているのかを伝えることができた。また、参加校がどのように指導を進めているかについても交流することができた。

２月２０日は、南河内地区のフロンティアスクールと大阪狭山市の学校を対象に、研究発表会を行う。その場では、４年と５年でそれぞれ少人数指導による公開授業と、討議会を行うことを計画している。その場でも、本校の研究内容について、地区内の学校に広めることができると考えている。

また、昨年度各学校の実践をもとに大阪狭山市教育委員会が作成した「きめ細かな指導実践事例集～Step１～」に引き続き、今年度の「～Step２～」中においても、フロンティアスクールとしての実践の詳細を載せ、具体的な取組内容を広めていくとともに、次年度へとつなげていく。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　✔１５年度からの新規校　　１４年度からの継続校

【学校規模】　６学級以下　　７～１２学級
✔１３～１８学級　　１９～２４学級
２５学級以上

【指導体制】　✔少人数指導　　✔Ｔ．Ｔによる指導
✔一部教科担任制　　その他

【研究教科】　国語　　社会　　✔算数　　理科
生活　　音楽　　図画工作　　家庭
体育　　その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　✔有　　無